


小児の
高次脳機能障害
と
その対応



神奈川県立秦野養護学校
かもめ学級

事故や病気のあと あの子は変わった

なまけているの？

ふざけているの？

こんなこともわからないの？

なんですぐおこりだすの？

どうして人の気持ちを無視するの？

約束したのにわすれちゃうの？

e t c

外見では、普通の子どもと変わらないのに

もしかすると、それは

高次脳機能障害 かもしれません

高次脳機能障害 ～よく見られる症状～

覚えられない

記憶障害

新しいことが覚えられない
忘れっぽいことに気づいてない
日付や場所が分からない
昔のことが思い出せない



気が散りやすい

注意障害

集中できない
うっかりミスが多い
持続性に欠ける
二つのことに
気が配れない

行動にまとまりがない

遂行機能障害

計画が立てられない
優先順位が決められない
段取りが悪く
テキパキ要領よくできない
行動の途中で混乱する

どこが悪いかわからない

病識欠如

障害があることを理解できない
なんでもできると思っている
人の意見を聞かない



こだわりが強い

固執性

気持ちが切り替えられない
同じことをし続ける
1つのことを繰り返し言い
続ける

自分では何もしようとしない

自発性の低下

やる気がない
動きたがらない
何でも面倒に感じる

子供っぽくなった

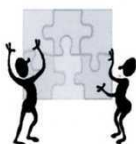
依存性・退行

人に頼る
口先ばかりで行動が伴わない
家族に代弁を求める

我慢ができない

欲求コントロール低下

いくらでも食べてしまう
先のことを考えずにお金を使う
待てない



ささいなことで怒り出す

感情コントロール低下

気分にもうがある
場にそぐわない泣き笑い
一度にいろいろなことがあると
パニックを起こす

しゃべれない

失語

話すことや言葉の理解が難しい
書くことや読むことが難しい



道具が使えない

失行

動作がぎこちない
思い通りに動けない
操作手順が分からなくなる

見ているものが分からない

失認

見えているのに
何か分からない
知っている人の顔が
見分けられない



人間関係を作るのが苦手

対人技能拙劣

相手の気持ちを察することができない
他者の落ち度を過度に指摘する
一方的な主張をする

片側を見落とす

半側空間無視

片側にあるものに気づかない
食事を食べ残す
人や物にぶつかる
文章の左側を見落とす など

落ち込んで何もできない

抑うつ

やる気が出ない
一日中横になっている
悲観的になりやすい

場所が分からない

地誌的障害

道に迷う
場所や方向など
位置関係が分からない

「高次脳機能障害 相談支援の手引き」

神奈川県リハビリテーション支援センター発行より引用

学校でよく見られる行動

少し前にできていたことが、突然できなくなる。または、できなかつたことが、突然できる。(計算・漢字・自転車に乗るなど) 人の名前が覚えられない。言われたことや、やろうとしたことを忘れてしまう。いつも使っているのに下駄箱の場所がわからない。→**記憶障害**



1 度にたくさんのことを言われると、わからない。→**記憶障害・注意障害**

集中力が続かない。ちょっとした刺激(視覚・聴覚・嗅覚・触覚)で、すぐ気持ちに変化する。話しかけられてもすぐに答えることができない。→**注意障害**

指示されないと何から始めてよいか、次に何をするかわからない。予定が変わるとどうしてよいかわからなくなる。

→**遂行機能障害**



1 度始めると、なかなかやめられない。気持ちや場面の切り替えができない。気に入ったものがあると手放せない。臨機応

変に考えることができない。→**固執性**

そんなに大変なことをやっているわけではないのに、すぐ「疲れた」「眠い」と言ったり、寝転がったり、だらだらしたり眠ってしまったりする。あくびが多い。できないことや意に合わないことを提示されると極端に疲れてしまったりイライラしたりする。→**易疲労性(神経疲労)**

怒ることではないときでも、急に怒り出す。楽しい場面になると、ハイテンションになり止まらない。できないことや気持ちにそぐわないことを



やらなければならなかったりすると、物をやぶったり投げたり、人を蹴飛ばしたりたたいたりという行動を取る。できないことや自分の気に入らないことに直面すると、必要以上にふてくされたり、机の下に潜ったり、教室を出て行ったりする。

→**感情コントロールの低下**

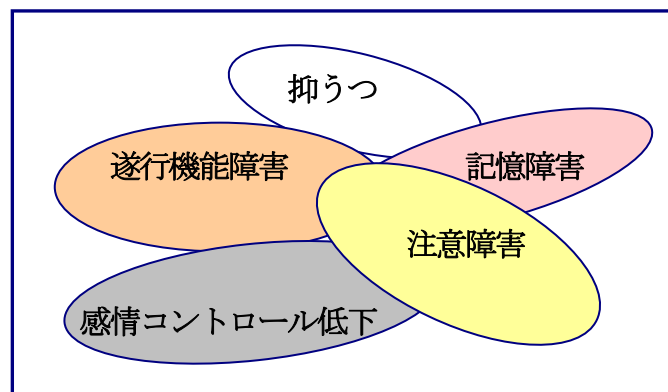
過剰な正義感や正論をふりかざし、トラブルに巻き込まれる。



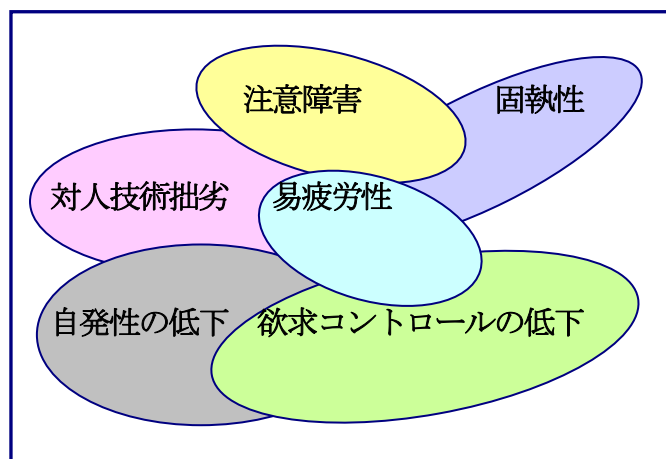
→固執性・対人技能拙劣

高次脳機能障害の誰もが、これらの症状すべてを呈するのではなく、いくつかの症状が組み合わさって出ます。つまり、高次脳機能障害と診断されても百人百通りの症状だということです。

Aさんの場合



Bさんの場合



高次脳機能障害ってなに？

病気や事故で脳を損傷したことによって、生じる障害です。

原因

○脳の病気

脳炎・脳症（インフルエンザ 麻疹 等）

脳出血・脳梗塞

脳腫瘍

○事故による脳の損傷

脳外傷（交通事故 転落・転倒等）

低酸素性脳症（溺水 窒息等）

頭をぶついたり、脳しんとうをおこしたりしても

高次脳機能障害になることがあります

高次脳機能障害支援モデル事業による行政的診断基準

I. 主要症状等

1. 脳の器質的病変の原因となる事故による受傷や疾病の発症の事実が確認されている。
2. 現在、日常生活または社会生活に制約があり、その主たる原因が記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などの認知障害である。

II. 検査所見

MRI、CT、脳波などにより認知障害の原因と考えられる脳の器質的病変の存在が確認されているか、あるいは診断書により脳の器質的病変が存在したと確認できる。

III. 除外項目

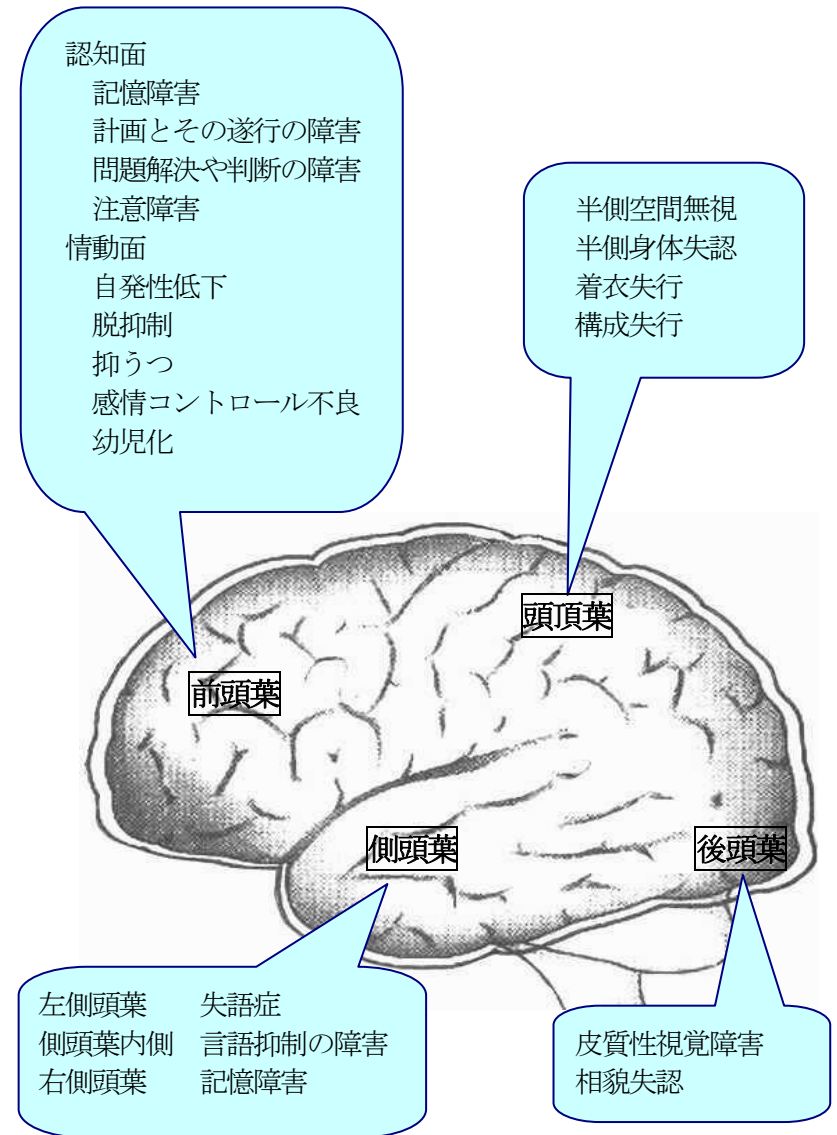
1. 脳の器質的病変に基づく認知障害のうち、身体障害として認定可能である症状を有するが上記主要症状（I-2）を欠く者は除外する。
2. 診断にあたり、受傷または発症以前から有する症状と検査所見は除外する。
3. 先天性疾患、周産期における脳損傷、発達障害、進行性疾患を原因とする者は除外する。

IV. 診断

1. I～IIIをすべて満たした場合に高次脳機能障害と診断する。
2. 高次脳機能障害の診断は脳の器質的病変の原因となった外傷や疾病の急性期症状を脱した後において行う。
3. 神経心理学的検査の所見を参考にすることができる。

「高次脳機能障害 相談支援の手引き」神奈川県リハビリテーション支援センター発行より抜粋

脳損傷部位と主な症状

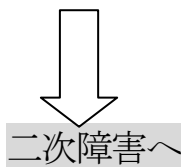


栗原まな 著 小児の高次脳機能障害より 改編

本人も困っています

- ・思うようにできない
- ・人との関係がうまくいかない
- ・イライラや不安状態になりやすい
- ・今の自分の状況もわからない

うまく対応しないと

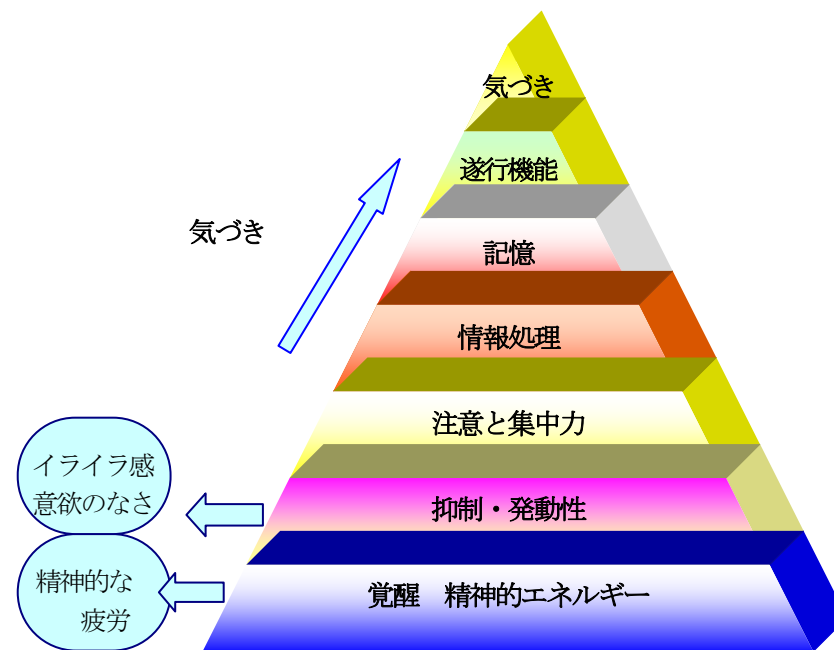


- ・自信喪失 ・不安 ・抑うつ ・絶望感
- ・他者への不信 ・無気力 ・引きこもり

いじめの対象になることもある

回復にはある程度順番がある

認知機能は下図のとおり、下層から上層に常に影響を及ぼしています。例えば、「精神的エネルギーが機能しないと上の全てがうまく作動しない」「注意の障害があれば、記憶の機能に影響する」ということです。高次の機能を働かせるためには、注意・記憶などの認知機能の総合的な働きが必要になります。



どうしたらいいの？

対応する私たちの基本の姿勢は

- ☆ 安心できる人間関係をつくる
まずは人的環境を整えましょう
親、先生、友だちの理解が1番の環境です

- ☆ 児童や生徒の状態・思いを感度よく受け止める

- ☆ 関わり方の3つの要素
表情・・・明るく穏やかに
声の調子・・・はっきり・ゆっくり
声かけ・・・短く・わかりやすく

こんなことに気をつけて・・・

- ☆ 禁止命令よりおすすを多く
「だめ」より
「しましょう」

- ☆ 曖昧よりも選択を
「何にする？」より
「〇〇と△△のどちらにしますか？」

- ☆ 失敗しそうなことは勧めない

- ☆ 焦らず、ゆったりと時間を組む

- ☆ 対応する私たちが穏やかな気持ちで

様子をよく見ていると、苦手そうな部分も見えてきます。
例えば、音やにおいに敏感であれば、それらを遮断する。
周りの物に気持ちを奪われやすければ、視界を遮るか、物

のない部屋に移るなどの工夫が必要です。

質問コーナー

Q1 高次脳機能障害は治るのですか？

軽いものは治ることもあります。治らないものでも、環境を整え、社会生活を積み重ねていくなかで症状が軽くなる可能性があります。

Q2 高次脳機能障害と発達障害はどう違うのですか？

高次脳機能障害には記憶力が悪いとか、注意集中できないなどいろいろな症状があります。それらの症状は後天性の脳損傷をもつ子どもたちで注目されてきていますが、注意欠陥多動性障害や学習障害などのように発達障害の子どもでもたくさんみられます。一般には後天性の脳損傷の子どもでの症状の方が複雑で個人差が大きいと言えましょう。

Q3 高次脳機能障害の子どもは、通常級と支援級のどちらで対応すればよいのですか？

あくまでも子どもの症状に合わせて、家族と学校とで相談しながらクラスを選んでください。場合によっては日ごと時間ごとに自由が効くような体制が必要かもしれません。

Q4 受傷以前からその症状はあったが、新たに「高次脳機能障害」ということになるのですか？（例 ①場の雰囲気を読めず、雰囲気を壊すようなことを言う ②人の顔や名前が覚えられない等）

受傷以前からあった症状も高次脳機能障害と誤りではありません。しかし現在世の中では「高次脳機能障害」という用語を、後天性脳損傷のあとに生じた高次脳機能障害に対して用いているのが一般的です。そこで、受傷後の対応法を考えたときのコツとしては、受傷前からあったものでも、その後が生じたものでも、生活に困る症状を「高次脳機能障害」としてまとめて考えていけばよいのだと思います。

Q5 その子の症状がどうしてもあまえやわがまま、怠惰に見えてしまうのですが、高次脳機能障害とどう区別したらよいのでしょうか？

難しい質問です。診断はどちらであろうと構いませんので、子どもと約束を取り決めて、少しずつ課題をやり遂げられるような工夫をしてみてください。あくまでも少しずつステップアップをはかり、成功した充実感を味わわせるようにすることが大切です。

Q6 子どもとおとなの高次脳機能障害は、ちがうのですか？

基本的には同じです。高次脳機能障害は、環境によって症状が異なって見えるものですから、子どもとおとなの生活環境がちがうために、ちがって見えることが多いでしょう。

保護者の声（高次脳機能障害の対応について）

※こんなことがよかった！

担任の先生が、その都度（保護者と）一緒に、目標を立ててくれたので、一つずつできていくことが見えてよかった。

授業毎に手のあいている先生が子どもに付き添い、サポートや声をかけてくれた。

学級内で個別に対応してくれた。

登下校の送り迎えに（子どもの安全配慮のため）自家用車を使う許可をもらえてよかった。

先生だけでなく、学校中の保護者の皆さんに呼びかけて協力していただいて、本当に嬉しかった。

受験の時に特別措置をしてもらえて助かりました。

いつも、友人や周囲の方たちが励ましてくださって、頑張ることができた。

※こんなことがつらかった！



小学部の時は、本人の状態をよく理解してくださり、様々な面で成長が見られた。中学部になって、小学部でのことが生かされていないことが多く、先生方の理解も乏しいと感じました。

中学生になって、教科ごとにたくさんの先生と関わるようになって、各先生に病気の理解の差を感じました。

からかいにかつとなった我が子は、友だちをなぐってしまい、けがをさせてしまいました。高次脳機能障害ということが先生にも理解され、子どもたちにも指導していただければ、防ぐこともできたかと思えます。今後どうしたらよいか本当につらかったです。

校長先生に、「高次脳機能障害を完治させてから、学校に来てください。それまで、院内学級でいいのでしょ。」と言われ、戻れないのではと不安に感じました。お医者様が口添えしてくださって、戻ることができました。その後も、私たちにはつらい厳しい意見を投げかけられました。

我が子は、車いすに乗っているわけでもなく元気もあるので、一見何もないように思われがちですが、銀行や公共の場に行くと大騒ぎになってしまい、その度に疲れて帰宅する状態です。何とか社会にも、（高次脳機能障害のことが）浸透してくれるとよいです。

学校（前籍校）側は当初学校に戻り、受験することを不安視していました。そのため、保護者側も、学校だけに任せるのではなく、学校と保護者が協力して、高校にはいるための支援をすることで、理解され対応することができました。

親の付き添いが何事にも必要で、ほかの幼い兄弟のこともあって大変であり、もっとうしてあげたいと思っていて手を貸してあげられないこと、また、体が大きくなり母一人では様々な場面において対応が難しくなってきました。

学年が上がるたびに、保護者の意向を受けながら引き継ぎをしましょう。小学校から中学校に上がる時は、より丁寧な引き継ぎが必要です。特に中学校では、担任、教科担任、委員会・部活等、関わる先生が多いので、たくさんの方に理解していただけると助かります。



参考文献

小児の高次脳機能障害

栗原まな著 診断と治療社 2008年

高次脳機能障害 どのように対応するか PHP新書436

橋本圭司著 PHP研究所 2007年

高次脳機能障害 相談支援の手引き ～支援の導入と障害の理解～

神奈川県リハビリテーション支援センター
2006年

高次脳機能障害セミナー2008 ー理解編ー

神奈川県リハビリテーション支援センター
所長 大橋正洋 2008年

○ ○ さんの場合 (実際に整理してみましょう)

◎症状

◎基本的な対応法

◎具体的な対応例

編集後記

「学校がよくわかってくれたので、同じ学年クラスのまま卒業できた。」「『わかりました。大丈夫です。』って先生は言ったのに、子どもが『こうしたああした』と言われ、つらい。」「どうしたら、先生や（学校の）子どもたちがわかってくれるのか悩んでしまう。」等々、突然の事故や病気で以前とは変わってしまった我が子をどうやって学校に行かせ、よりよい環境の中で教育してもらえるのだろうかと保護者の方たちは、本当に悩んでいらっしゃいます。そんな学校への橋渡しとして、簡単に読めて理解しやすいものができたらということで、この冊子を作りました。まだまだ十分ではないのですが、まずは伝えることから発信したいと思います。また、かもめ学級のアンケートに答えてくださった保護者の皆様、そして冊子作りのためにご協力いただきましたたくさんの方たちに心よりお礼申し上げます。

小児の高次脳機能障害とその対応

2008年12月25日 初版発行

2009年 6月24日 2版発行

編集発行 神奈川県立秦野養護学校 かもめ学級

武田 明 神崎 かやの

内海 誠 伊藤 ますみ

協力 神奈川県総合リハビリテーションセンター

小児科部長 栗原 まな

臨床心理士 斉藤 敏子

神奈川県総合リハビリテーションセンター

地域支援センター

〒243-0121 神奈川県厚木市七沢516

神奈川リハビリテーション病院内

秦野養護学校 かもめ学級

TEL 046-249-2207